

中原悌二郎の

写真コレクション(三)

武井 敏

はじめに

一昨年、昨年にひきつづき、中原悌二郎(二八八八—一九二二年)が収集した写真コレクションについて紹介する。今回は「西洋絵画」十二点、「ギリシア彫刻」一点、「近世工芸」二点、「水墨画」一点についてである。とりわけ前二者は、画家を志し上京し彫刻家に転向した中原の芸術観を考察するうえで興味深い資料であるとともに関連するテキストも残っているため、これらを中心に紹介したい。

レンブラントとセザンヌ

西洋絵画の写真を分類すると、レンブラント四点、セザンヌ三点、ルーベンス二点、レオナルド、ルノワール、カリエール各一点となる(ただしレンブラントのものは書籍の切り抜きであり表裏を各一点と数えた)。西洋絵画の写真コレクションはわずか十二点に過ぎないながらも、レンブラントとセザンヌの写真が多いことは中原の芸術的嗜好を反映している。

例えば、中原の芸術的嗜好は、将来の妻・信にあてた一九一八年(大正七)六月五日付の手紙中の「ギリシヤ、エジプト、日本の天平、近代ではロダンやルノアール、セザンヌ等を見ると、全く手も足も出なくなる」¹⁾、画論「空想的に迄で進んだ写真主義」のなかでのロダンとセザンヌの写実力への賞賛²⁾、一九二〇年(大正九)の「マネーとルノアール」

ル」における、親友・石井鶴三のマネ評価に反する自身のルノワール評価³⁾に認められる(引用は適宜旧漢字をあらためた、以下同様)。

さらに友人たちの言及からもそれはうかがい知れる。日本美術院でもに研鑽を積んだ平柳田中は「画家ではレンブラント、近代のセザンヌ等^{ママ}に對し、深き尊敬を以つて、其写真等を、貧しき囊中を割いて蒐集した」と記し⁴⁾、中原が佐竹の原に近いある家の二階を借りていた一九一五年(大正四)頃、その部屋を訪れた石井の次の回想もある。

室はガランとして、畳はザラ／＼してゐた。机が一脚と小さい画架にキャンパスが架けてあつた。床の間に堆くロダン、レンブラント其他諸家の作品の写真版が取り散らされてあつた。君はロダンとレンブラントを殊の外崇敬してゐた。「ロダンの作品はどれも皆好きだ。ロダンは自然だ。レンブラントとロダンは殆ど同じだ」と言つてゐた。其時何かの話から、多分セザンヌぬの絵の複製を前にしての話だつたと思ふ。「セザンヌは好きかい」と君が云つた。「セザンヌは大好きです。セザンヌとゴーホやゴーガンと一緒にして論ずる人があるが可笑しい」と私は云つた。「ウン君の心がはつきり解るね」と云つた君の言葉が思ひ出される⁵⁾。

その後、一九一七年(大正六)に日暮里の中原の下宿を訪れた石井は、中原が新たに日本の古い仏像の写真を多く収集していたことを知るのである。これは、前号で記したように、嗜好の変化というよりはむしろ拡大してのことである。

写真の購入、中原の愛した芸術家

前々号および前号で紹介したように中原は写真を夜店で購入していた

が、時には注文して手に入れることもあった。一九一九年（大正八）二月十日の日記には「レンブラントの肖像複製一枚、ミレーのデッサン二枚を注文す。」とあり、また中原が結核のため病臥を余儀なくされた最晩年の一九二一年（大正十）の購入については看病にあたっていた妻・信が次のように記している。「その頃、新聞の広告にでもよって知りましたか、日本橋のとある美術品店に泰西名画の写真の来た事を知り、中原は注文して、ロダン、セザンヌ、ルノアール、またギリシャの古い彫刻の写真など十数枚を買いまして、それらを一枚ずつ、適當の距離に私に持たせて置いて、仰臥のまま眼鏡をかけては、丁寧な、長い間見て楽しんでおりました⁷」。購入が最晩年であるだけに、現存する写真の幾葉かはこの時に購入したものである可能性は十分あるだろう。

中原の美術撰取は何も写真だけに限られたものではなく、当然ながら書籍を通してもなされた。それは、例えば友人の清田昇平に宛てた一九〇八年（明治四十一年）十一月二日付の手紙の文面からうかがえる。

小生が持つてる独逸製のミケランジェロやタピンチの画集（代価一円五十銭）此の手の本にて、ロダンやムニエーなどがあるのだが、ロダンは丸善に一冊来て居つたので広瀬が早速買つてしまつた。それア実に素的なものだ。写真版が百ばかりあつて、比較的鮮明に出て来ている。〔中略〕ムニエーは丸善に来て居らぬので早速注文をした。〔中略〕それから中村が同じ手の本で「ドナテロー」を買つた⁸。

この文面から、中原がミケランジェロやダ・ヴィンチの画集を所有していたこと、ムニエの画集を注文したことがわかるのだが、残念ながらこれらをはじめとする書籍は一冊も確認されていない。またこの文面は、画像の程度、友人の購入状況にふれている点でも興味深い。

文中の「比較的鮮明」という言葉から察せられるように、当時の写眞版は画像が粗いものが多く、現代とはちがいがそのほとんどがモノクロであった。そうした写眞版を頼りに当時の日本の芸術家たちは異国の名画を旺盛に撰取していたのである。これについては中原が親友・中村彝のレンブラント理解を綴る次の一文に象徴されよう。「中村君は彼れ一流の執^レ抛^レさを以つて、レンブラントに関するあらゆる智識を、此の写眞版のうちから会得しようと思つて、その本が手垢で黒くなる程くり返し是れを見つめた。そして此の日本に生れた不幸な青年は、此の貧しい写眞版のうちから、兎も角もレンブラントの真髓と思はれるものを会得した（強調筆者）⁹」。

友人が購入した画集についての感想や中原の所有する画集への言及は、それだけでも中原の芸術的嗜好を伝えてくれるのだが、そうしたことを友人間で実際に言葉を交わしながら話題にしていたことを現代のわれわれに想像させてくれるよすがでもある。中原は赤貧洗うが如きであったというから、こうしたことを話題にしながら、乏しい懐中と相談して自身が買うべき画集、借りて済ませる画集を選別していたのかもしれない¹⁰。

また友人から借りるだけでなく、書店や図書館も有効に使っていたようである。このことは親友・中村彝が「丸善を訪ねては、その書棚からピンチや、ミケランジェロや、ミレー等の素晴らしいデッサンを引きずり出して立見をしたり、上野の図書館では、明治初年に和蘭政府から日本へ寄贈されたレンブラントの素敵なオリヂナル・エッチングを、誰れも気づかない中に探し出して、独り有頂天になって模写したり¹¹」していたと記していることから察せられよう¹²。

中村はまた中原の好みのおそらくは一九〇七年（明治四十）当時の傾向について「ミレーを愛し、コロを愛し、更にドラクロアを熱愛せ

る¹³」と記している。先に引用したように、後年の中原にはミレーのデッサンの写真版を注文した記録が残っているが、ミレーをはじめこれらの画家の写真類は伝わっていない。このことから購入したものの諸事情により失われた写真も少なからずあったことだろう。

このほか中原が、関心を寄せた芸術家としてヴァン・ダイク（八九頁、九二頁）、モネ（一〇八頁）、ドガ（一一二―一三頁）、ワッツ（一一三頁）シャバンヌ（一二八頁）の名前がその日記に記されており¹⁴、佐藤朝山は「中原君との交遊」のなかで、中原の好んだ芸術家として、ティントレットの名前も挙げている¹⁵。なお、中原の関係資料中に、今回紹介したものうち近世工芸についての言及はなく、水墨画（雪舟）については「雪舟、牧溪等、彼れの崇拜する作家の写真版¹⁶」との言及がある。

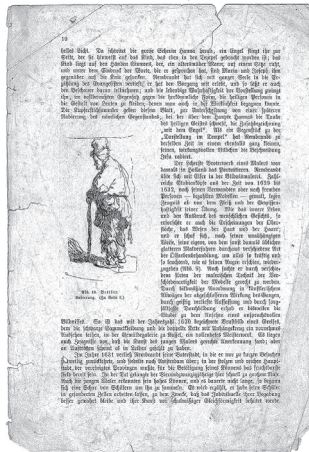
（次号につづく）

- 1 中原悌二郎「伊藤信への手紙」『彫刻の生命』中央公論美術出版、一九七八年、一八九頁参照。
- 2 中原悌二郎「空想的に迄で進んだ写実主義」、同書、五七頁参照。
- 3 中原悌二郎「マナーとルノアール」、同書、五〇頁参照。
- 4 平櫛田中「中原君に就いて僕の知つて居る事」、中原信編『彫刻の生命』アルス、一九二二年、二九二頁参照。
- 5 石井鶴三「中原君と私」、同書、三〇三―〇四頁参照。
- 6 中原悌二郎「日記」『彫刻の生命』中央公論美術出版、前掲書、一二七頁参照。またこの年の四月に新潟より妻・信が上京し、この時の新居について「壁間にはミレーの素描、レンブラント、セザンヌの自画像の額など掛け」と信が回想しており、注文した写真版を購

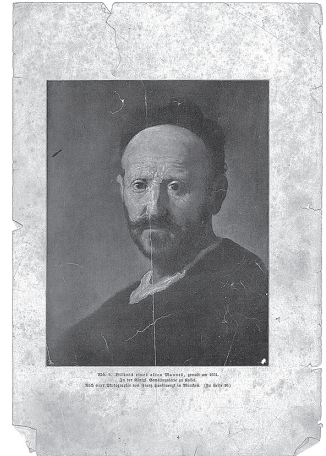
- 7 入し壁に掛けていたとも考えられる。これについては中原信『中原悌二郎の想出』日動出版部、一九八一年、一一五頁参照。
- 8 中原信『中原悌二郎の想出』、前掲書、一九〇頁参照。
- 9 中原悌二郎「書簡」、中原信編『彫刻の生命』、前掲書、一五二―一五三頁参照。
- 10 中原悌二郎「中村彝氏に就いて」、同書、三八―三九頁参照。
- 11 若く貧しい画学生たちのなかには、荻原守衛のように「日本にさへ持帰つて置けば、所有権は誰れにあつても同じ事だ」（斎藤与里「碌山館」『読売新聞』一九一一年（明治四十四）四月二十七日）と考え、友人が所有しているものは敢えて手に入れなかったということもあるだろう。
- 12 中村彝「中原悌二郎君を憶ふ」『芸術の無限感』中央公論美術出版、一九七七年、六五―六六頁参照。
- 13 また一九一九年（大正八）二月十九日の日記には「美術院よりシャバンヌ、ギリシア肖像集を借りて」とある。これについては、中原悌二郎『彫刻の生命』中央公論美術出版、前掲書、一二八頁参照。
- 14 中村、前掲書、六四頁参照。
- 15 日記の頁数は、中原悌二郎『彫刻の生命』中央公論美術出版、前掲書のものである。
- 16 佐藤朝山「中原君との交遊」、中原信編『彫刻の生命』、前掲書、二四―四一頁参照。また佐藤は、ブレイク、ジョット、アンジェリコを否定する中原の言葉も記して興味深い。これについては同書二四〇頁参照。
- 17 中村、前掲書、六六頁参照。



③レムブラント《赤い帽子の老人》
25.8×17.5cm



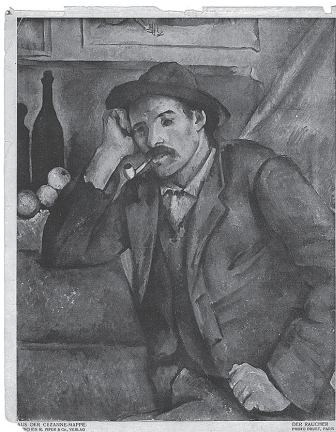
②レムブラント《杖を突く乞食》
25.8×17.5cm (①の裏面)



①レムブラント《禿頭の男》
35.4×25.4cm



⑥セザンヌ《オワーズの谷》
22.2×27.8cm
裏面に「Cézanne/3029」の鉛筆書



⑤セザンヌ《パイプの男》
28.2×22.5cm



④レムブラント《年取った男》
21.5×16.4cm
裏面に「SB9」の鉛筆書



⑨ルーベンス《十字架上の基督》
30.2×22.7cm



⑧ルーベンス《イザベラ》
33.3×25cm



⑦セザンヌ《首吊りの家》
27.8×32.2cm
裏面に「Cézanne/La Maison du Pendu」の鉛筆書



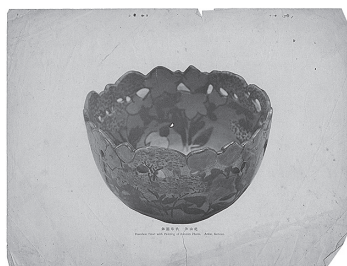
⑫カリエール《髪を解いた若い女》
32.9×26.4cm
裏面に「Eugène Carrière/1312/Tête
de jeune fille aux cheveux dénoués/
(Mlle Marguerite Carrière)/a Mme
Carrière」の鉛筆書



⑩ルノワール《横たわる浴女》
14.2×36.2cm
裏面に「Renoir/3372(?)」の鉛筆書
白鳳社の印



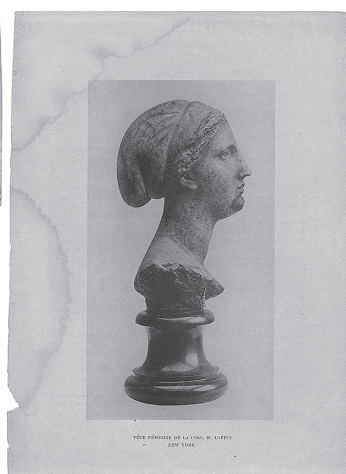
⑩レオナルド《イザベラ・デステの
肖像》
35.5×26.6cm
裏面に「Vinci」の鉛筆書
白鳳社の印



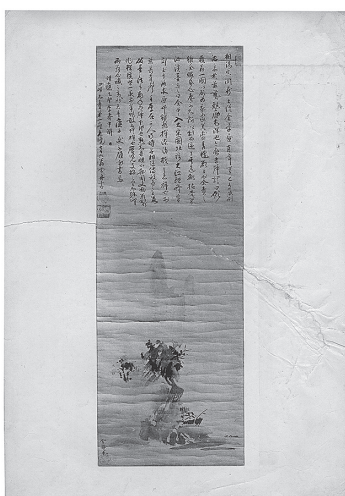
⑮尾形乾山《秋草図鉢》
22.8×30cm



⑭尾形光琳《野々宮図硯箱》
19.6×36cm



⑬ギリシア彫刻《女性の頭像》
30.1×22cm



⑯雪舟《山水図》
40.4×28.1cm
裏面は前号紹介の広目天 (No.31)